
学園遊戯 ～オレ達が出逢ったのは偶然じゃない...奇跡という名のdestinyさ～

萌萌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園遊戯 ～オレ達が出逢ったのは偶然じゃない…奇跡という名のdestinyさ～

【Nコード】

N8057E

【作者名】

萌萌

【あらすじ】

頭がよくて綺麗…それゆえに柚木明日香はいつも女の子に間違えられ友達もいなかった。しかしそんなある日、勉学のエキスパート達が集う『特進クラス』への編入を認められる。そこで彼女を…じやなくて彼を…ああもうどっちでもいいや！そこでオカマを待ち受けていた者とは……！！

第1話：まずは逃げることから始めよう（前書き）

はじめまして。萌萌と申します、よろしく願いしますm（――）m

初のコメディーに挑戦してみました。因みに投稿するのも初めてです。

かなり心臓バクンバクンですが、楽しんで貰えると嬉しいです♪

タイトルをいじったのでかなり長くなっていますが、『学園遊戯』が一応要となるタイトルです。そしてその隣にある『』の中のサブタイトルは狂夜先生の心の叫びです。どうか受け止めてあげて下さい。

第1話：まずは逃げることから始めよう

新たな境地で生まれる出会い、悲しみ苦しみ、そして愛。運命に翻弄され、一人の少年はかけがえない友と巡り会う。少年の名は柚木明日香^{ゆずき あすか}。透明感のある白い肌、道を歩けば誰もが振り返るその美貌。これほど美しいオカマはいない。あ、間違えた……男はいない。

スポーツは苦手とするものの、勉強で彼に敵う者はいない。なにもかも揃った輝かしい人生。しかし、そんな彼にも悩みがあった……。

これはそんな美少年と、それを取り巻く仲間達の物語である。

『柚木明日香君、今度から君は特進クラスへ移るんだ』

直々に校長に呼び出され、僕は今日から別館にある特進クラスで授業を受ける事になった。

学年は関係なく、成績がズバ抜けた者だけこのクラスに編入できる。一度ここに入ると遅刻や欠席、その他の校則違反も多めに見てくれるようになる。かなりえこひいきなシステムだが、僕は自分自身の向上の場でもある、この特進クラスにずっと憧れを抱いていた。

そしてその夢がようやく叶った晴天の朝、僕は別館の門の前にいた。

「よし、遂にこの日が来た。頑張るんだ僕」

朝アイロンがけたばかりのシャツが汚れていないか、もう一度チェックして僕は自分に言い聞かせた。

クラスの人達に馴染めるか、勉強についていけるか、不安は尽きなかったが悩んでいても仕方ない。当たって砕けるだ。僕は足を進めた。

何時も生活指導の先生が立っている場所の近くで何やら妙な音が聞こえる。近付くにつれ、音に便乗して女の人の叫び声まで聞こえてきた。

「ほら！さつさと四つん這いにおなり！」

不思議な発言の次に響く何かを叩く音。とりあえず僕は学校の敷地内に足を入れた。

「ふん、このマゾ犬が！ケツを突き出さなきゃ学校には入れないよ！」

何故か黒の下着にガーターと網タイツ姿の女の人が、髪を振り乱しながらムチを振り上げている。

何故サディストがここに？

とりあえずそれしか浮かばなかった。

「ああ……もつと泣くんだ！はぁ……快感だ。たまらない」

僕もたまらない。朝からこんな濃いものを見せつけられては。女性は一たすらお尻を突き出している生徒にムチを打ち続ける。興奮しているのか、顔が紅潮している。

「先生、許して……ああん！」

殴られている男子生徒もまた卑猥な声を上げる。これは夢だろうか？もし夢じゃないなら、神様、僕が一体何をしたというのでしょうか？

「おや？そのメス犬、ここの生徒だね？」

女の方は息を荒げながら僕を見据える。どうやら気付かれたらしい。

「ちっち違います！コスプレです！」

僕は手を振りながら後退りする。

「そう、男装の趣味があるのね。よくお似合いだけど……私の目はごまかせないわよ、メス犬」

全然ごまかせてるじゃないか。

僕が女に間違われる容姿なのは自分でよく分かってる。身長は150センチしかないし、目はくりくり二重だし、華奢で体力もない。この16年間、ずっと『オカマ』と呼ばれ続けてきた僕だから理解できる。けど譲れないものくらい僕にだってある！

「僕は男です」

「いいえ、メスよ」

「男だ」

「男になりたいメスなのかしら？」 女の方はいつの間にか四つん這いになっていた生徒の事を忘れ僕に集中している。

僕もいつの間にか時間を忘れ、女の人の言葉に反論していた。

茜空が頭上を覆っている。どの位ここで激論を交わしただろうか。僕の精神力はもう限界に達していた。

「はあ……しぶといメス豚だね」

女の人が息を切らしながら喋る。

「だ、から……僕はミザール星人でもなければネメックス星人でもない！僕は男です。いや、その前に地球人だ！」

僕は膝に手をつけて地面とにらめっこした。

汗がびっしょりシャツに染み込んでいる。

キンコンカンコンと、チャイムが鳴った。

僕ははっとした。重大な事を忘れていた……僕はまだ学校の中に入っていない。こんな変態サデリストと校門の前で何をやっていたんだ！せっかく特進クラス初登校の日だというのに。

僕は肩に鞆を提げて走りだした。

「すみませんけど僕学校に行かないと」

「お待ち！私の獲物だ、逃がしちゃしないよ！」

女の人が叫ぶと同時に、飛んできたムチが僕の足に絡み付く。つていうか、あなた本当に何なんですか！どう考えても有り得ない技でしょ。

「お前は今日から私の下をはいつくばって生きていくんだ。永遠に

束縛から逃れられないようにしてね」

「嫌です、かなり」

「ふんっ、素直じゃないメス豚だね。けどそこが調教しがいがある
つてもんさ」

もう誰かこの人を連れ去ってくれ。焼き肉食べて、焼き肉食べて、
焼き肉食べたような感覚になる。次の日はお腹ぐるぐる上からげー
げー、さあ大変だ。あ、食事中の人ごめんなさい。

「僕は今日からこの特進クラスの生徒になっただんです。ずっと憧れ
てて、しかも今日が初登校だったのに……あなたのせいで目茶苦茶
だ！」

僕は足をジタバタと動かしながら怒鳴り上げる。こんな時力があ
ればいいのに、そしたらこんなムチ引き契ってやるのに。

「ほう、お前特進の生徒かい。なら私の教え子だね」

は？このサドは何を言ってるんでしょう？

「そんな鳩が豆鉄砲くらったような顔するんじゃないよ。私はここ
の教師、サディスト麗子さあ……ああん」

最後のあぁは何？っていうか、教師が学校の前で、しかもほぼ
裸で調教なんかしてていいのですか？免許剥奪でしょ。っていうか、
誰か止めないんですか？止めましょうよ！

「さあ、これでなんの問題もなくお前は私の奴隷になれるねえ。可
愛がつてあげるからね、メス豚」

問題まみれでしょう。そして僕はメスではない。

ふと顔を上げると、サディスト麗子が僕の眼前で笑っていた。思いきり両手を掴まれ押し倒される。

「さあ、いい声で鳴くのよおおおお！ギャハハハハハハハ！」

「ただの妖怪じゃないですか！強制わいせつで訴えますよ！」

と、その時、一発の銃声が耳を貫いた。

続けてもう二回。気がつくと僕の足に絡み付いたムチが切れていた。サディスト麗子は恐る恐る立ち上がり、校舎の屋上に目を向ける。

「スナイパーか……」

サディスト麗子がぼそりと呟く。

僕は恐怖のあまり弾丸が貫いたコンクリートを呆然と見つめていた。

「ふん、どうやら今日はここまでのようだ。楽しみは次に取っとくよ」

そう言っただけでサディスト麗子はムチを拾い上げ、校舎の中へと消えていった。

何か予期せぬ事が僕の前に立ちはだかっている。何かが起ころうとしている。あ、もう起きてしまったけど。

何か、とても嫌な予感がする……邪悪な何かが僕の身に降り懸かろうと……まあ、解説はこの辺にしまして、とりあえず僕はため息をついた。

『A-クラス』と書かれたそこは4階にある特進クラスの教室だった。僕は深く息を吸い込み目をつむった。

ゆっくりと教室のドアに手をかけ、勢いよく引いた。

「あ、あの、ぼぼ僕、今日からこのクラスに編入する予定でした柚木明日香と言います！ちょっと色々ありまして……は、はっきり言えばサディストに捕まってたんですけど……そ、それで授業に間に合いませんでした！すみません！」

僕はまくし立てながら深く頭を下げた。

「サディスト……そうか、それは永遠の愛と独占欲。即ちそれは、君に捧げるオレの愛」

甘く囁くような声に、僕は頭を上げた。

教卓の上に足を組んで座る男の人が目に飛び込んできた。さらさらの茶色い髪に鋭い目付き、何故か真っ黒のスーツに胸元は全開。首やら手やらにじゃらじゃらとアクセサリーを付けている。そしてどっという訳か、手には赤ワイン。

「マリア、遅いじゃないか。オレは君を待ちわびてここで死ぬのかと思ったよ。ああ、だが……それも悪くない。君をこの胸に刻んだまま死ぬるといふのなら、それも愛に生きたオレへの罰」

あ、教室間違えたな。きつとナルシスト部かなんかだろ、ここは。

「さあマリア、こっちへおいで。君に溺れた哀れな男の傍に……」

瞬だけでも居てくれ」

きつと間違えたな、うん。だって幻覚が見えるもん。

僕は教室の外に出て、もう一度札を確認した。『A - クラス』

……んーと。

……んーと。

……。

「マリア、どうして逃げるんだ？」

振り返ると男の人が僕の真後ろに立っていた。有り得ない香水の匂いだ。これだけ臭いなら人も殺せる。

「あの、勘違いです！僕は男だしマリアって名前じゃない。それにここにはただ特進の教室を探しに來ただけなん——」

男の人は突然言ってる僕の口を塞ぐ。「マリア、オレの付けた愛称が気に入らないなら取り消そう……だが、オレの心に残された君への愛まで取り消さないで」

やっぱりここは特進クラスじゃない。『集え！妄想ホスト』とか『どこまでもストーリーカーで行こうね』とか、その辺の類だ。うん、よく分からないけど、多分そういう系だ。

「マリア、オレは確かに許されない恋をしてしまった……だが、心の中で奏でる Romance をもう押さえる事はできないんだ！」
取り敢えず僕は逃げた方が良さそうだ。このままでは僕は Romance の主人公にされてしまう。え？もうされてるって？そこは突っ込まないでよ。

という事で僕は逃げた。

第2話：逃げるな！目を背けるな！そっと胸に手を当ててドキ　ドキを受け止め

妄想ホストから上手く逃げ切った僕は裏庭の花壇の前でしゃがみ込んでいた。

僕はやっぱり本館に居た方がいいんだろうか。授業には出られないし、変な人には遭遇するし、女の子に間違えられるし。

やっぱり僕は勉強しか取り柄のない男女と、イジメられてる方がお似合いなのかな。

「なんだ？野良猫が迷いこんであ」

僕の頭の上で図太い声がした。僕は天を仰いだ。

「どしたよ？お前見ない顔だな。なんかあったのか？」

僕と同じ制服を着た男の人が隣であぐらをかく。スラッとした体格だけど僕より遥かに大きい。耳に幾つもピアスを付けて、何となく不良っぽいイメージが漂っている。

「お前ここに居るってことは特進の奴か？」

「うん、今日からなんだ。柚木明日香です。あなたは？」

「俺は幹孝久^{みき たかひさ}」

「幹君かあ。なんか嬉しいなあ」

僕は笑った。今日初めて笑ったような気がした。「……何が？」

「んーだって、今日は全然いい事なくってさ。変なサディストには絡まれるし」

「ああ、サディスト麗子だな」

「知ってるの？」

「ああ。あいつは生活指導だ。因みに俺らの担任は狂夜恋^{きょうやれん}。ホスト

っぽい格好したやつなんだ」

あの妄想ホストも教師……やっぱりナルシスト部じゃなかったのか。しかも担任って。校長の神経を疑ってしまった。

「僕、馴染めるかなあ」

不安のあまり、抱えていたものが涙となって零れ落ちた。

——ドッキューン！

……ん？今なにか鳴ったような気がしたけど。まあ、気のせいかな。

「——もってやる」

「え？」

「俺がお前を守ってやる！」

幹君が突然僕の手を握りしめる。

「えっ？えっ？えっ？」

僕は手と幹君を交互に見つめる。

「安心しろ、俺も特進の生徒だ。お前を泣かせる奴は教師だろうと許さねえ！そして俺はおま、お、お、お前のす、すすすす」

「お前のすすすす？幹君大丈夫？顔が赤い」

僕は幹君の額に手を置いた。

「ああ！お、俺はお前が好きだなんて言ってねえ！違う！違うんだ……落ちて着け俺。お前の、お前のすき焼きが……お前がすき焼きだから」

「なに言っただよ！僕がすき焼きってなに？すき焼き食べたいの？」

「いや、違う……お前を食いたい」

「は？僕は牛じゃな——」「ぬおおおおおお！もう止めてくれ！俺は健全なんだ、俺は男なんだ、なのに……なんだこの動悸息切れは！」

はい、救心。と渡したい所だが、今僕の手元にはパブロンの半分で出来ている優しさしかない。くそっ！せめてウコンの力があれば。

「と、取り敢えず、明日から来いよ。俺がそ、そそそ傍にいてやるから」

僕は幹君の温かい言葉と、初めて友達が出来た喜びで泣きまくった。幹君は僕が泣き終わるまでずっとずっと隣に居てくれた。

が、しかし、この時明日香は知るよしも無かった。自分を優しく抱きしめてくれている幹が、自分を女として見ている事に……。

第3話：ダイニングメッセージなんてどうでもいいんだよ！ただ……あなたに会い

明日香は怯えていた。自分はあのクラスで本当にやっていけるのかと。

口下手で社交性のない自分が、あんな濃い連中に囲まれてこれから学校生活を送らなければならない。

——やっぱり自分は特進クラスには向いていなかった。

一人悶々とそんな事を考えている時、決まって幹の顔が浮かんた。今まで友達がいなかったので、幹というキャラの登場により明日香は歓喜していた。しかしそれは黒幕が仕組んだ甘い罠だった……。

そう、作者は明日香を虐めたくて仕方なかった。じわじわと美しい顔が歪んでいく姿が堪らなく——って、違っよ！変な事を書くのは止めてくれ！！

ふう、つい取り乱してしまった。

あれ？何の話してたっけ？

「マリア、昨日はすまなかった……君の姿を見てオレはSouuを押さえる事が出来なかった。お詫びにこの花束を君に」

僕が手を出すより先に、幹君がそのバラの花束を足で踏んでいた。

「狂夜、教室入るなりキモいよ。こいつ困ってんだろーが」

幹君は僕の体を庇うように前へ出る。

「そうか、そうなのか……君とオレはサバイバルと言うことが」

訂正すらしたくないけど、それはライバルの間違いでは？

「まあ、何でもいいけど。オレはこいつとダチだからな」

幹君の言葉でまた僕は昨日のように泣いてしまいそうになった。幹君……彼だけは僕を男として見てくれる純粋な友達。

――バン！

突然教室の奥で何かが倒れる音がした。

僕達は一斉にそっちに振り返った。

「あ、ああ……」

見覚えのない女子生徒が何かに怯えている。どうやらあの女の子が机を倒してしまったようだ。

黒髪に大きな眼鏡、そして制服ではなくメイド服を着ている。んーなんたるな、何かを連想させる風貌だな。でもあんまり思い出さくないな。

「お宅オタ子、どうした？」

狂夜先生が女子生徒に近付いていく。

んーこの際怯えてる事はまあいいとして、『お宅オタ子』って何ですか？酷すぎませんか？誰ですか、名前考えたの。もうちょっと真面目にしてよ。

「狂夜先生……あ、あの」

お宅さんは唇をガタガタと震わせ今にも泣きそうだ。僕はそんなお宅さんが可哀相になり、近づいてハンカチを渡した。

「大丈夫？」

僕は声をかけた。暫く顔を覗き込んでいると、お宅さんの顔がだんだん赤くなっていくのが分かった。

「王子様……」はい？

お宅さんはうつとりした表情で僕を見つめている。

「好きです」

お宅さんは僕の腕をしっかりと掴みながら呟いた。その顔はまさに少女漫画の恋するヒロイン。僕達のバツクには今、無数の花束がちらめられている。『キラリーン』みたいな効果音もあるはずだ。

僕は今……好きと言われたんですか？女の子に、初めて好きと言われた……この僕が――。

ガッツポーズを取る寸前で夢は打ち消された。

「おい、てめえ！明日香になに手えだしてんだよ！」

「オレのマリア。オレだけのマリア……例え生徒であつてもマリアを汚す人間は許さない！」

男二人が僕とお宅さんの間引き裂く。

「明日香、俺は別に嫉妬してる訳じゃねーんだ。けど、この状況を黙って見てる訳にはいかねえ！」

幹君は僕を抱き寄せ、お宅さんと距離をおく。

「幹！その手を離せ！マリアをオレに返すんだ！これ以上……オレ達の邪魔をしないでくれ！！」狂夜先生は手を差し出し、苦しそうに叫び声を上げる。

「御主人様はあたしだけの御主人様です！メイドは何人もいらわないわー！」

お宅さんはほうきを上へかざして、何やら訳の分からない呪文を唱え始めた。

つていうか、なんだ？この微妙なハーレム。「そんな事よりさ、お宅さんさっき怯えてたじゃない？何かあったんでしょ？」

お宅さんは思い出したようにあつ！と、声を上げた。

「そうなのです！御主人様はあたしの事がなんでもお分かりなんです。やっぱり御主人様！」

いや、だってさっき叫んでたじゃん……。

「実はその窓際の所で人が死んでるのでございます」
お宅さんの言葉に皆顔が真っ青になる。

なんだってえー。

嘘だろー。これってコメディーじゃん？

何でミステリーになっちゃってんの！？

死体とかマジで無理だし！！

というような叫びが二時間位飛び交った。そして二時間後。

「ん？よく見るとこれぬいぐるみじゃねーか」

「そうか。しかしぬいぐるみには思い入れがないな。君の温もりを感じない、君がここにいない事を証明してるにすぎない」

幹君と狂夜先生はこのズレに疑問を抱いた事はないのだろうか。

「この死体は何者なのか、読心術で探りましょ！」

お宅さんが目を輝かせながら手を上げる。

ああ……何となく分かっていただけまたイタイ人が一人増えた。

「読心……謎めいた君の心に触れたい。だけどそれは叶わなくて、君はあまりに遠すぎて」

狂夜先生、それは何ですか？

「あのなあ、これはぬいぐるみなんだよ。それに読心術ってなんだよ？」

「あちゃ！読心術はダメですかあ。じゃあまずはレベル上げをしましょ。ルーラを覚えたらとりあえず御主人様とデートできます！」
そしてこの二人も全く噛み合っていない。それと、ルーラを覚えても僕はデートしない！！

「あ、見ろ！ここにダイニングメッセージがある」

狂夜先生が指差したのはぬいぐるみの横に置かれたノートの切れ端だった。

『やったのは吾郎さん』

紙には赤色のマジックでそう書かれている。

「ダイニングメッセージ……君に宛てた最後の手紙。振り向かない

でくれ、オレを忘れて。幸せになるんだ」

全く意味が分からない。

「分かんねえな、誰が犯人なんだ」

幹君は腕を組みながらうんうんと唸る。いや、吾郎さんですよ。

「はい、あたしのハンドパワーをもってしても解けません……無能なメイドでごめんなさい、御主人様」

吾郎さんですよ。後、ハンドパワーは全然関係ないよよよよん。

「仕方ない、あいつを呼ぶか」

「ええ、呼びましょう」僕は微笑みを浮かべながら頷く幹君とお宅さんに聞いた。

「誰？あいつって」

二人は顔を見合わせてもう一度頷く。

「この特進クラスじゃあいつより頭の切れるやつはいない！大人のままでも頭脳は大人さ！！」

「難事件をすぐさま解決！ジツチャンの名にかけて真実はいつも一つ！！」

なにか嫌な予感がする……。

二人は踊りながら交互に喋り、そして最後に二人同時に言った。

「その名も、名探偵。ツド！」

交わっている！交わり過ぎている！！そして僕はファンに殺される！！

二人が輝かしくキメのポーズをとり、僕がその様に震えている時、
狂夜先生はサディスト麗子に拉致されていた。

第4話：混ぜっちゃったんだからしょうがないじゃん

僕達はとりあえず、教室から居なくなつた狂夜先生の行方を探さずに『名探偵。ツド』に会いに行く事になった。

どんな人なんだろう、名探偵って。凄く渋くて格好いい人なんだろう。そんな事を考えながらトボトボと廊下を歩いていると、突然幹君が立ち止まった。

「やつだ」

幹君がそう言った途端、銃弾が僕目掛けて飛んできた。そもそも、なぜ高速な銃弾が僕の肉眼で捉えられたかというと、それは——とてつもなくゆっくり飛んできたからだ！

「大丈夫か？明日香」

目を開けると幹君が僕の上に覆い被さっていた。どうやら僕を庇ってくれたらしい。

「凄い、凄すぎるぜ、名探偵」

幹君が汗を流しながら苦笑いする。何が凄いのかよく分からないけど、僕には幹君の熱気のほうが凄く思えるよ。

「やはり魔獣を呼ぶしかないようですね」

これ以上意味不明な者が集まってどうするんだ？っていうかお宅さ

ん、あなた自体が魔獣では？

そして、砂埃の舞う中、誰かが唾を飲む。ふっと横を見ると幹君はロケットランチャーを構え、お宅さんは得体の知れない化け物を召喚している。

少し頭を整理したい。ここは学校の中で僕達は『名探偵。ツド』を探しに来た。なんで探偵を探してるのか、理由もイマイチだけどまあいいや。

でもさ、僕達普通の高校生だよ？しかも勉強のスペシャリストなんだよ？それなのにさ、拳銃出てきたり珍獣出てきたりって可笑しいでしょ。世界観ズレてるでしょ。皆さ、もっところ……真面目にやろうよ！

——って事を男らしく口に出して言えたらなあ。

「あついきません！隊長！画用紙が折れ曲がってランチャーが偽物だとバレそうです！」

「なに！？お宅、ドライアイスをもっとだせ！それからその、似ても似つかん魔獣の絵を書いた風船を早く仕舞え！」
そんなのどうでもいいんだよ！どうせもうバレてるんだよ！

真っ白な霧の中から、不適な笑みを浮かべた男の人が銃を片手に姿を現わした。さっき僕を狙った人だ。それもかなりゆっくりな弾で。

「ふん、まさか砂埃がドライアイスでランチャーが画用紙とはな……全く気付かなかったよ」

なぜ！？男の人の言葉に僕はそれしか浮かばない。

「当たり前だ、このランチャーは一年かけて作ったんだ」

いや、そういう問題ではないよ。幹君。

「君達、私を探してたんだろ？そう、私こそが名探偵。ツドだ」

名探偵。ツドは髪を掻き上げ僕達に向かって指を指す。

整った顔立ち、細身の体型、きちつと制服を着て見た目だけだと優等生にしか見えない。だけど独特の雰囲気があって少し謎めいている。

探偵とはこんなものかな。

「俺達もこいつの顔を見るのは初めてなんだ」

「え？そうなんだ」「ああ。数少ない特進の生徒の中で、こいつは何時も教室にはいなかった」

幹君と僕の会話に名探偵。ツドが割って入る。

「初めましてだね。幹君とそっちはお宅さんかな。それから君は……」

僕と名探偵。ツドの目が合う。

「ああ、思い出した。第1話でサディスト麗子に襲われてるのを助けたんだ」

「え！？」

「え！？」

僕と幹君が同時に声を出す。「サディスト麗子に襲われたって……あいつ！俺の明日香に！……あつ俺の明日香って何言ってるんだ！違

う、俺は女が好きなんだ!!」

「けどあの時僕を助けてくれたのはスナイパーのはず。あなたは探偵なんですよね?」

名探偵。ツドは僕と幹君を交互に見ながら頷く。

「探偵なのにスナイパーなんですか?」

「私は探偵でもあり暗殺者でもある」

また意味が分からないのがでてきた。「探偵としての名前は『名探偵。ツド』だが、それは暗殺者としての顔を隠す為のカムフラージュに過ぎない」

「じゃあ本名は何なんですか?」

僕は思い切って聞いてみた。

「明日香……俺は、お前は……本当に好きなのは男なんですか!? 女なんですか!?!」

幹君は意味不明な言葉を叫んだ。

「私の本当の名は暗殺者ポン太だ!!そして幹君、君のその問いには答える事はできない!私にもプライバシーというものがある」幹君は『ガーン』という効果音と共に石のように固まり、そのまま泣き崩れた。

「答えられないって事は、お前も男が好きなんだな……明日香に、明日香に惚れてるんだな」

「ポン太って凄く可愛い!名探偵の時とはイメージ変わりますね」僕はあまりに意外なその名前を聞いて笑った。

「まあ、どう捉らえて貰っても構わないけどね」ポン太は目を伏せて鼻で笑った。

「て、てめえ！どう捉らえてもって事はやっぱり明日香の事――」

「あ！じゃあ僕は可愛い名前って捉らえますね」

何かが可笑しい僕達の会話に、さっきまで影の薄かったお宅さんが遂に割り込んだ。

「あのー、皆の会話が混ざり合って可笑しい事になってます」

うん、そうだねお宅さん。僕も何となく可笑しいと思っていた。

そして、僕の足元で泣き続ける幹君の姿が不思議でならなかった。

第5話：ポン太の事件簿

名探偵であり暗殺者であるポン太を仲間に加えた明日香達はこれまでのいきさつを説明した。

死体だと思っていたものが実は人形だったこと。その横にはダイイングメッセージが残されていて、犯人は吾郎さんであること。そして狂夜先生が居なくなったことすら忘れていたこと。

この三つのヒントを手掛かりに、ポン太の名推理が今動き出す！

「ふむ、話は分かったよ」ポン太は手で顎を摩りながら何か考えているようだ。

「あたし達じゃ全く謎が解けなくて……名探偵なら分かると思ったんです！」

お宅さんが真剣な眼差しでポン太を見つめる。

うん、でもねお宅さん。謎もヘツタクレもないんだよ。犯人は吾郎さんなんだよ。

「安心したまえ。このポン太に解けない謎はない！」

「それじゃあっ！犯人が分かったんですね！？誰ですか？やっぱり

ゴンザレスごり山ですか!？」

ゴンザレスごり山なんてキャラ登場すらしてないじゃないか!

「残念ながらゴンザレスではないよ、お宅さん。真犯人は……この中にはいない!！」

「えっ!？」

「俺は……俺はどうしたら?このトキメキをどう受け止めればいい……」

「わん!」

僕の足元で泣き続ける幹君と最後の変な雑音以外は、一斉にポン太の言葉に反応した。

「この不可解な事件を生み出した悪魔……犯人はあなただ!透!」
ポン太はポケットから薄っぺらいCDのようなものを取り出し、それに向かって叫んだ。

「なんですの……?それは」
沈黙を破ったのはお宅さんだ。

「かまいた。の夜だ。犯人はこの中にいる!私はこれまで187回この事件に挑んだが何故かいつもサバイ。ルゲームになってしまう……いつも透を疑っているのに……何がいけないんだ!！」

それは透さん以外の方が犯人という事なのでは……。
「残念な事に真理を疑った夜もあったよ……恋人だからって信用はできない。もしかして主人公が犯人!？」と思っってしまったりもした

…… ああ、あれはついっかかりしてたよ。透が主人公だという事に私はつい最近まで気付いていなかった」

「ついっかかりっていうか、主人公が犯人なら自分で分かるじゃないか！そしてなんで187回もプレイしておいて透が主人公だと気付かない？」私には、私には透以外考えられないというのに……！」
ああ、このままポン太が更にヒートアップすればかまいた。の夜を知らない人は全くこの物語についていけなくなる……！！

それ以前に、やっぱり僕はファンに殺される！それはマズイ……！！

「あつ、あたし犯人が分かってしまいました！」
お宅さんがポンツと手を叩いて満面の笑みを見せた。

「なに？透以外に犯人がいるというのか？」ポン太はお宅さんの言葉に目を剥いて詰め寄ってくる。

「はい！犯人は吾郎さんです。ダイイングメッセージに書いてありました！」

……。
…… 僕の心が回復するまでちょっとだけ時間を下さい。

そしてちょっとだけ時間が経った。

「では犯人はやはり透かね？」
ポン太が頭を抱えながら言った。

「あたしとしては暗黒大魔王山田の線が有力かと思われます」
お宅さんがほうきを振り回しながら言った。二人の言い争いを見て僕は思った。もう、いいじゃないですか……誰が犯人でも。もう何でもいいですよ……ハ、ハハハハハハ。
僕は足にしがみつく幹君を引きずりながら教室に戻った。

深くため息をついて廊下を歩いていると、とてつもない地響きが校庭から聞こえてきた。

僕は窓にベツタリと顔をくっつけ、自分の見た物が真実かどうかを改めて確認した。

「オーホホホ！狂夜！今日こそ私のモノにおなり！！」

「しつこくてよ、サディスト！君とは一夜限りのアメリカンドリームだったのさ！！」

僕は目を疑った。サディストと狂夜先生の声は聞こえるものの、狂夜先生の姿はどこにも見当たらず、グラウンドにあるのはサディストが闘牛に追い掛けられている姿だった。

「なんで闘牛が……」

僕は困惑のあまり独り言を呟いていた。

「狂夜……逃がしゃしないよ！おっと、そんなにゆっくり走ってていいのかい？それとも私の餌になりたいのかい！」

何故追い掛けられているサディストが追い掛けている側のセリフを言ってるのかよく分からない。それともあの人にはしか見えない何かがあるのかな？

ああ、今のは見なかった事にしよう。これは全部夢なんだよ、僕は勉強のやり過ぎで頭が可笑しくなったのさ……いえーい。

僕の口からまたため息が漏れた。そして幹君は僕の足に頼ずりをしていた。

第6話：オカマがいいかマカオがいいか真剣に考えてみたくなったんだ。分かる

赤に染まった雲が上空を流れていく。ああ、雲はあんなに有意義に空を旅できるのに、僕はここで何をしてるんだろ。

僕は河川敷にいた。一人、目の前で流れる川を見つめていた。近くにあった石ころをひよいと掴みとり、川に向かって放り投げた。虚しくぼちゃん、という音だけが聞こえた。

「僕、何がしたかったのかなあ」
僕は体育座りをして顔を埋めた。

最初から可笑しいと思ってた。サディストや妄想ナルシストが教師だったり、メイド服を着た不思議ちゃんや探偵なのに暗殺者とか…
…全部有り得ない話だ。

だって僕が目指していた場所は勉学の道を志す者なら誰でも憧れる、あの『特進クラス』だ。バリバリのお堅い優等生しか居ないはず。それなのに何故あんな意味不明な人しかいないんだ。

「勉強が、好きだったただけなのになあ」
僕はまた近くにあった石ころを掴み、投げようとした。

「うつうつ…僕、普通がいい。普通に授業したいよ」
駄目だ、僕！ここで泣いたらまたオカマって呼ばれちゃう。泣くな！男じゃんか。

「明日香」

後ろから声がした。振り返るとそこには幹君が立っていた。僕は手で目を擦り無理矢理笑顔を作った。

「さつきは悪いな、取り乱しちまって。俺の言ってた事はその一忘れてくれ」

え？なんか言ってたつけ？ごめん、幹君。僕そころじゃないや。

「なんかあったのか？元氣ねえな」

幹君は隣に座り僕の顔を覗き込む。

「さつき、サディストが闘牛に追い掛けられてたんだ」

「へえ、そいつは凄いな」幹君は感嘆の声を上げる。

「何とも思わないの？幹君、特進クラスって今までずっとこんなだったの？僕さ、がっかりしたんだ……みんな遊んでばかりで授業もしないで。僕が目指してた所ってこんな物だったんだあって」堪えていた気持ちが溢れ出た。僕は頬を涙で濡らしながら幹君を見据えた。

なんて弱いんだろ、僕は。こんな事で泣くなんて。

「——いいんだ」

「え？」

「なんて可愛いんだ！！」幹君はそう言って僕を力付くで抱き寄せる。

「は、離して！幹君！」

「離したいのは山々だけど体が俺の気持ちと反比例するんだ！ああ……今すぐ女を好きになれる薬があったら飲みたい」

何言ってるんだ、幹君。冗談を言うのは止めてくれ。僕は真剣に悩んでるのに。

その時、僕達の足元に解読不可能な無数の文字が浮かんだ。

「幹！御主人様から離れなさい！」

ふと横を見ると、ほうきをふりかざしたお宅さんが幹君を睨みつけている。

「御主人様に気安く触らないで！」

「うるせえ！俺だつて触りたくないけど手が勝手に動くんだ！」

幹君は何故かぼろぼろと涙を零している。やっぱり彼も普通ではないかもしれない。

「ノ、ロ、ウ、ゾ」

お宅さんはこの世のものとは思えない声を発し、そして猛スピードで僕達に向かって突進してきた。

なんかコメディじゃなくて異次元になつてきているのは僕の気のせいかな。え？そんなの最初からだつて？そこは突っ込まないって約束じゃないか。もう僕もそこそこギリギリchopなんだよ。

「幹！オレのマリアから離れるんだ！！」

何処からか狂夜先生の声が聞こえた。けど、辺りを見回しても狂夜先生の姿はどこにもない。

「狂夜！どこにいやがる！」

「どこなんですの！？先生！」

二人が僕に寄り添い、見えない狂夜先生から守るように警戒する。

「ふふん、そんな所を探してもオレは居ないぞ！」

また狂夜先生の声だ。こんなにはつきりと聞こえるのに姿が全く見えない。一体、一体どこにいるんだ……狂夜先生！！

「わーれはエロティカーせぶーん！！！」

エロティカセブン！？あのサザ。の破廉恥な名曲を、純真無垢な子供達が遊び回る河川敷で堂々と歌い上げるなんて……！！

「あつ上を見る！お宅！」幹君が叫んだ。
僕はその言葉に従って上を見上げた。

大きな紙飛行機のような物に全裸の姿で張り付いた狂夜先生がこっちに向かって飛んでくるのが見えた。

あの人は教師という自覚があるのだろうか？いや、それ以前にあの格好を人として疑問には思わないのかな？

「あいつ、翼を手に入れたんだ！俺達にはない自由という名の翼を……！！」

「素晴らしいですわ！ああ……あの空の向こうへ連れて行って。愛と夢の世界へ！」

幹君とお宅さんはキラキラと輝かしい視線を狂夜先生に投げつける。
なんだい、二人揃ってその温度差は。熱苦しいとしかコメントできないよ。

そして暫くして狂夜先生は地上に降り立ち、僕達の50分に渡る熱い説得によって漸く服を着た。

「オレは自分を偽りたくないのさ。素直に全てをさらけ出して生きていきたい……そのどこがいけないんだ？」

狂夜先生は完全に不貞腐れ、僕達と目を合わせようとしない。

僕としてはさらけ出す場所を間違えましたね、としか思えない行動だったんだけど。

「ふん、まあいいさ。マリアには見て貰えたしね。あれが君の好みのタイプかどうかは版画で表現して明日にでも提出してくれ」
「なんの話ですか！？そしてなぜ版画なんですか！明日までにできないですよ！」

「狂夜、お前がどうしてここに来たのか俺には分かるよ」
幹君と狂夜先生が見つめ合う。

「はいっ、お二人がここに居る理由、あたしも同じですよ」
お宅さんが笑いながら人差し指を頬に当てる。

「なんだ？何なんだ、みんな揃って。」

「明日香！」

幹君が僕の肩に手を置いて薄く笑う。「お前の言う通り、確かに特進は勉強できるだけの馬鹿の集まりだ。正直俺は学校なんて興味ねえし、クラスの連中とも仲良しこよしするつもりもなかった。けどな、俺、お前に会って変わったんだよ」

幹君……。

「あたしは今まで現実の世界で楽しい事ありませんでした。だから頑張って超能力を覚えて、魔法を覚えて……無理矢理楽しい世界を作ろうとしてました。けどそんな時に御主人様に出会いました」

お宅さん……なんか途中だいぶ可笑しい事になってたけど。けど、二人共こんな僕を想ってくれてるんだね。嬉しいな。

「マリア。最初の登場が麗子サディストの次と聞いて断ったんだが……君に会って変わった。やはりあの時に巡り会って良かったと、

そう思っただんだ」

狂夜先生……そうですね、色んな意味で被ってますからね。サディストと。

そっかあ、みんな僕の事こんな風に想ってくれたんだ。あれ？なんか、嬉しくて涙が出てきちゃったよ。ちえっ、こいつらめ！よせやい！

ああ、そういえば僕、初めてだな……こんなに友達できたのって。しよっぱい、しよっぱいなあ。これが青春の味かあ。僕に大人の階段を上らせやがって。よし、あの電柱まで競走だ！

「ありがとう、みんなありがとう」

僕達は四人で円を作った。そして僕は沈んでいく太陽の光りを見据えて泣いた。そんな僕に三人は声を揃えて言った。

「勉強が全てじゃないだろ……」

僕の心臓が大きく動いた。

そうだ。僕は間違っていた。学べべき事は勉強だけじゃないのに……そうだ、そうだったね。勉強だけで人の価値は判断できないよね。勉強なんてできなくなったら、僕達の未来は無数に広がっているね。忘れていた。僕、一番大事な事忘れていたよ。特進クラスなんてもうどこでもいいよねっ！

「よし！今からかくれんぼと鬼ごっこをしよう！」

「混ぜんのか！？」

「素敵ですつ、御主人様！」

「かくれんぼと鬼ごっこ、隠れる者と追う者……それは即ち永遠に追いつく事の出来ない究極のLoveゲーム」

明日香は一番大事な事を忘れてしまった。そしてポン太の行方はいった、謎である。

第7話：初めての授業

早速だがここで一度、これまでの粗筋を振り返るとしよう。

うつかりまんまと特進クラスの連中に唆されそうになった明日香は、既の事に我へと返った。

後もう少しだったのに……チキショー！と思いきや、究極の秘密兵器『赤いHeartがブギウギ』が残されていた事に気付く。

しかし最後の最後という所で裏切り者はアーシェリーではなく最愛の恋人、ベロニカだったという結末にジヨンは嘆いた。

後もう少し、後もう少しでこの愛のラブソディーが終結するのに……化学反応を起こした七人の妖精達がそれはそれは美しい翼でハラハラ、ドキドキ。だからってクラスで一番人気の女の子の笛を舐めたのは鈴木じゃないのに、転校生に突然天使の投げキッスされて、この世を支配する悪魔を倒しに行くため、Sexyダイナマイトがボンバイエになる所を見届ける必要があった……。

という感じで、続きの第7話始まり始まり！。

河川敷の一件で危うく僕は洗脳される所だった。けれど、今更本館に戻る訳にも行かず、仕方なく僕は特進クラスで授業を受ける事になった。

「では今日は久しぶりに授業をしようと思う。せっかくマリアもこのクラスの生徒になった訳だし」

狂夜先生は教卓の上に座って足を組む。

僕は少しワクワクしていた。特進に来て今日が初めての授業。相当レベルが高いに違いない。けど、それでもやっと大好きな勉強にありつける。

「よし。では今日の授業の内容について希望があれば足を組んで前髪を掻き揚げてくれ、オレが順番に当てていく」
「なぜ挙手ではないんですか？先生。」

「はいっ」

トップバッターに躍り出たのはお宅さんだった。

「なんちゃって授業をしませんか？ありとあらゆる物事を自分で想定してそれになりきるって内容です」

お宅さんは笑みを浮かべて言った。

なんちゃって授業……うん、想像力が豊かになっていいかもしれない。

「そうか、想定か。マリア、それでいいかい？」狂夜先生、どうして僕だけに聞くんです？

「別にいいですけど、幹君は？」

「俺もそれでいいぜ」

幹君は手を上げて答えた。

「よし、今日はなんちゃって授業に決まりだ。ではまずオレから」
狂夜先生は突然身嗜みを整え、そして手に電話を持つフリをして話し出した。

「いやだなタ。リさん。オレはまだペーパーなんですよ？そんなビッグスターだなんて……ああ、明日ですか？ええ空いてますよ。え？言っんですか？それじゃあ……いいともー！！」

……すみません、先生。それなんですか？

「では君達もやるんだ」

何を！？今のやつを！？

「それはもしかしてあのー」

お宅さんが恐る恐る狂夜先生に尋ねる。

「そうだ！テレフォンショッピングだ！！いつ何時、笑ってい。ともから出演オフアーがきてもいいように今から練習しとくんのだ！」
安心して下さい。永久にきませんから。それとショッピングじゃなくてシヨツキングです。

「先生、なかなかやりますね。では次はあたしが」

そう言ってお宅さんは立ち上がると、思い切り息を吸い込んだ。

「この……チクシヨオオオオオオオオオオ！！！」

お宅さんの叫び声は教室中に響き渡った。けどごめん、お宅さん。寧ろそれの方が理解できない。

「では幹、次はお前の番だ」

狂夜先生は幹君を指差した。

「ああ、でも想定っていったってなあ」

「幹君、頑張つて！」

頭を抱える幹君に僕は笑顔で言った。

「あ、明日香……あ！なんだこのトキメキは！！やべえ……ち、違うんだ俺は。俺は、俺は……に、逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ……」

ああ！幹君……自分で意識してないだろうけど後半、碇シ。ジにな
ってるよ！！

「何をやってるんだ、幹。全くHeartがこもってないな」
意味の分からない所で先生に怒られ、幹君は更にしょんぼり君にな
った。

「なんかイマイチ盛り上がりませんね、先生」
「そうだな。仕方ないから山下gameでもするか」

なに！？山下gameって！

「いいか、先に山下を取った方が勝ちだ。オレは10オイル、お宅、
君は105ニーナからスタートだ」

「いいですよっ先生。絶対負けませんから！」
狂夜先生とお宅さんの間で火花が散る。

「ではマリア、君は審判をしてくれ。まずはオレからだ！ラウロ！
！」

「くっ、そうきましたか！ではあたしはデイスタス！！」

「なに！？この状況でデイスタスだと！ふん、恐ろしい奴よ！では
オレはメスタシアで最後だ！！」

あ、あのー。ゲームのルールが……。

「メスタシア！メスタシアですって！？どこにそんな力が残っていたというの！？でもね先生、先生はあたしには勝てないのよ」

えっと、お忙しい所大変申し訳ないんですけど。ゲームの意味がです……。

「勝てないだと？ふふん、それはどうかな。オレの力存分に味わうがいい！ナンマー！！！」

「ナンマー！？ナンマーですって！？ふんっその体で自殺行為だわ！先生は後1分も立ってられないはずよ！」

「くっ！そんなはずはない。マリア、どっちが山下を取ったか判断してくれ……」

だからゲームの意味が全然分かんないんだって！！

そして僕はとても大切な事に気がついた。これは僕が思い描いていた授業じゃない……！という事に。

第8話：謎の男、登場

終わりのない山下gameを続ける狂夜とお宅。そして外見に似合わずしょんぼり君になってしまった幹。しかしこの後物語は急速な展開を見せる！

「そういえばマリア。第1話から気になっていたんだが、どうして君は男子の制服を着てるんだ？」

狂夜先生は前髪を掻き揚げる練習を止めて僕に向き直った。

先生、それを指摘してくれるのを待っていました。僕は言った。

「みんな誤解してるみたいですけど、僕は男なんです！」

よしっ。バシッと言ってやったぞ！

しかし狂夜先生は僕の言葉を聞いて鼻で笑った。

「Boy? 君が? それはNoだろ」

あなた本当に教師ですか? なんですか、その英語力。

「信じてくださいよ! 確かに僕は女の子に間違えられるけど……でも真正銘男なんです!」

「ふん、ナンセンスだね。君はGirlだよ、オレのエンジェルGirlだ」

何がナンセンスなんだ!? 僕の発言がか?

「御主人様、そんなにムキにならなくてもあたしは一生御主人様のメイドですから」

近づいてきたお宅さんが僕の手をぎゅっと握りしめる。

いやいや! そういう話じゃなくって!

「そうだ、お前が女なら俺も悩む必要はない。明日香、いい加減素直になれよ」

しょんぼり君だった幹君が突然立ち上がり、僕に近づいてくる。

いやいや！かなり素直に生きてきたつもりなんですけど？困惑する僕の眼前に狂夜先生はセーラー服を突き出した。

「今の君でもプリティだ。だがこれを着る事によつて君は更にプリティになる。略してさらプリ」

何で略したんですか！？っていうか、可愛くなんてなりたくないよ！僕は男なんだ！！

「やや止めて下さい！先生！みんな助けてよ！！」

幹君とお宅さんが僕の体を両側から掴む。そして目の前にはセーラー服を手のにじり寄ってくる先生。ダメだ。このままだと僕はセーラー服を着させられる！

「誰か、誰か助けて！嫌だあ！」

——ガンッ！

僕が叫んだと同時に物音が耳を掠めた。嘘？本当に誰か来てくれた？僕はゆつくりとドアの方に目をやった。

「狂夜先生、レディは丁重に扱ってくださいね」

壁にもたれたまま足でドアを開ける男の人が視界に入った。

「神楽かくらか。何の用だ？」

狂夜先生の声が突然低くなる。そして僕は、やっとまともな名前の人が出てきた、と思った。

「そこのお姫様が嫌がってたものだから、助けに來ただけですよ」
神楽という男の人は、そう言うてにつこりと微笑んだ。

「オレはマリアをいじめていた訳じゃない。ちょっと遊んでただけだ。お前こそ、特進クラスの生徒でもないのに勝手に入ってくるな」

ちよつと遊んでた？いや、かなり本気だったぞ！

「特進クラス？これが特進クラスだって？笑わせるな狂夜」

神楽は手で口を押さえながら狂夜先生の言葉をおかしそうに笑う。

「ちよつとあなた、何なのですか？あたし達の事を馬鹿にしてるんですの？」

お宅さんが僕から手を離し神楽を睨みつける。

「あつごめんね。決して君達を馬鹿にしたつもりはないんだよ。ただ……君達は特進クラスを誤解しているようだから」

神楽は申し訳なさそうに謝ると、少し声のボリュームを落として言った。

「誤解してるって、俺達は何を誤解してるんだ？」

幹君が神楽に詰め寄る。一瞬沈黙が降りたが、やがて神楽はおもむろに口を開いた。

「自己紹介しよう。僕は生徒会長をしている神楽だ。皆さん生徒会の別名をご存知かな？」

神楽は少し間を置いたが、誰もその問いには答えなかった。

「そうか、やつぱり知らなかったのか。狂夜、あなたという人は――」

「やめろ！神楽、何が目的か知らないが、君達とのDeepな争いは既にFreezeしている！」

狂夜先生の顔がどんどん青くなっていく。何なんだ？生徒会の別名とか争いとか。なんか因縁でもあるのかな。

「狂夜、あなたが四天王の一人に負けた事は僕としても残念だったよ。僕はあなたを見込んでいた。だがしかし、何時までも君達を野放しにはできない。もちろんあのサディスト麗子も例外ではないよ」「四天王！？それに狂夜先生が負けたって……一体どういう事なんだ？僕は狂夜先生と神楽の顔を交互に見比べた。ふつと神楽と目が合った。

「まあいいか。今日の目的は彼女をさらう事だったし。狂夜、次まで生かしてあげるよ。それまでその命大事に使ってね」

神楽は不適な笑みを浮かべながら僕に近づいてくる。

「おい、てめえ！黙って聞いてりや調子乗りやがって！明日香は渡さねえぞ！」幹君が怒声を上げながら僕の前に出る。

「幹孝久。レベル152……ふつ、君も特進クラスには値しないな」

「な、なんだと！」

「つていうかレベルって何！？」

「特進の生徒をナメないでください！」

取っ組み合いになっている幹君と神楽に向かってお宅さんが突進していく。

「君はレベル1082か。なかなかいい線だけど……残念だね」

神楽がにゅと笑った瞬間、凄まじい光線が視界を遮った。なんかまた世界観ズレてませんか？これじゃあただのバトル小説ですよ。あ、そういえばバトル小説なんてジャンルあるのかな？今度104に電話して聞こう。

なんて悠長な事考えている場合じゃなかった！光が収まり、僕はきよろきよろと辺りを見回した。なぜか教室が横向に見える。

「お姫様、王子と一緒に来てくださいね」

僕の顔の上で神楽が囁いた。うん？これってもしかして……お姫様抱っこされてる？

「てめえ！明日香を返しやがれ！俺もまだ抱っこしたことないのに！！」

「御主人様はあたしの御主人様です！ラブ萌えアタックしますよ！」

なんかよく分からないけど、僕はとりあえず誘拐されそうになっ
てるらしい。

「悪いが君達と遊んでいる暇はない。それと狂夜、麗はるひから伝言を預
かっている」

神楽を睨みつけていた狂夜先生の顔が一変した。

「う、麗だと……！」

「どうしてもあなたに伝えて欲しいと頼まれたからね。『哀れみの
狂想曲……貴女がオレの傍にいない事は分かった。なのに、今
日もオレは貴女の幻影を夢見ている。狂夜、可憐に舞う一輪の花の
如く、夜を生きるオレの下で朽ちるがいい』ですって。確かに伝え
ましたよ」

狂夜先生は額から汗を流しブルブルと震えている。よく分からない
伝言だけど確かに凄い！色んな意味で。

「ではお姫様、行きましょうか」神楽はそう言って優しく笑うと、
教室のドアを蹴破って猛スピードで廊下を走り出した。

別に特進クラスに戻りたい訳じゃないけど、その場の勢いに流され
て、僕はへるぷみーと叫んでいた。

第9話：これが本当の『特進クラス』

生徒会長と名乗る神楽の手によって明日香は連れ去られてしまった。しかしその事態を知るよしもないバナナマンは蜜柑ばかり食べたがる。これはマズイと思ったスミス博士は今まで嫌がっていた内職を仕方なく始めた。

だがメロメロドラマチックなその他Aの合唱と共に、何とも奇妙なエキゾチックワールドと化した別名『渚』の踊りが一瞬にして爆発。だから全てはここから始まったのだと、村長は一人呟いた……。

「大丈夫？」

え？ 作者の頭がですか？ と言いかけて僕は止めた。

「あ、はい。えっとここは……」

僕は長椅子から起き上がり辺りを見回した。見覚えのない古びた教室だ。前後の記憶が定かじゃないって事は、どうやら僕は軽く気を失っていたらしい。

「安心して。ここは生徒会役員室だから」

神楽は僕の眼前でにっこりと笑う。

「あ、はい」

何だ、さっきは突然で分からなかったけど凄く綺麗な顔してる。好青年です！ って感じだし、髪の毛もサラサラでほんの少しシャンプーの匂いがして。この人、凄くカッコイイんだ。

「この人何者なんだろ……って思ってるでしょ？」

神楽は僕の足元にしゃがみ込んで僕の目をじーっと見つめる。

「はい」

僕は正直に言った。狂夜先生が見せた動揺といい、生徒会の別名といい、四天王といい。この人の発言には余りに謎が多過ぎる。

「君は最近まで本館にいたんだよね。じゃあ別館の事は詳しくないと思うけど……この学校を牛耳っているのは教師でもなければ校長でもない、この生徒会役員なんだよ」

僕は耳を疑った。生徒が学校を支配するなんて……聞いた事ない。

「もちろん君を別館に呼んだ校長もお飾りで、決めたのは僕なんだよ」

校長がお飾り……でも僕が本館に居た時は生徒会なんて存在、噂でも聞いた事なかった。

「僕達は影の支配者なんだ。余程の事がない限り表に出る事はないけど、最近の特進クラスは目に余るものがある」神楽は俯いてため息を漏らした。

「こういう事はあまりしなくなっただけど……『特進クラス』は二つも要らないからね」

神楽は苦しそうな表情を見せながら僕の手をぎゅっと握る。

「と、特進クラスが二つってどういう事ですか!？」

僕は身を乗り出した。

「知りたい? 君にはあんまり教えたくないんだけど」

「教えてください！」

僕は渋る神楽の肩を揺さ振った。

「生徒会の別名、特進クラスっていうんだ。2年前に色々あってね、二つに別れたけど……こっちが正しい特進クラスだ」

そんな……特進クラスが二つあったなんて！！

まああんまり驚くような事でもないけど。

でも2年前に色々あったって、狂夜先生とかな？それに四天王って、まさか。

「あ、あの……四天王って何ですか？」

「それはまだ分裂する前に特進の生徒の間で呼んでいた通称だ。僕を含めて後三人いるんだが、特進上位に君臨した者にだけ与えられた称号だった。今となつては僕達を示すキーワードみたいになつてしまっただけ」

そつか、じゃあこの人も特進クラスの生徒なんだ。そいでもって上位に君臨した四天王でもあって。尚且つ生徒会長。なんか紛らわしいな……。

困惑する僕を見て神楽は笑った。

「ごめん、ごめん。いっぱい名前があつて理解できないよね。まあ簡単に言つと、特進にも階級があるんだよ。で、上位に上りつめた者は四天王の称号を得られる。そして四天王になった人間は生徒会役員となりこの学校を操れるって訳さ」

うーん、なるほど。特進クラスの裏にあつたもう一つの特進クラスか！まあ、だから何？って感じなんだけどね。

「まあ色々と紛らわしいから、僕達の事は通称で呼んでよ。『生徒

会四天王』ってね」

笑った神楽の目がどこことなく挑戦的に見えたのは僕の気のせいだろうか？

「まあそんなつまらない話どっちでもいいや。今日君をここに連れて来た理由はね、僕達の仲間になって欲しいからなんだ」

神楽は無邪気に笑いながら僕の手にキスをした。はつきり言っただけで嫌がらせ？としか思えなかった。

「気に入らなかったの？」怒った僕の表情を見て、神楽は目につるうると涙を溜めている。

「僕は男ですよ？」

「違うよ！！！」

別に性別が全てじゃない世の中だけど、そこまで否定されると僕の明日は涙で見えませんよ。

「君は今日から僕の彼女になるんだ。おっと、嫌とは言わせないよ？もし変な真似でもしたら普段真面目に働いてる44人のSP、まあ仕事の内容を詳しく言えばクリーニング屋でタオルを畳むだけの係なんだが……その真面目にタオルを畳む彼らが一斉に君を呪い潰し、更に爆発する！いいね？」

なんかよく分からないけど……怖い！もの凄く怖い！！

そして僕はかなり強制的に神楽の彼女にさせられてしまった。

神楽に拉致された明日香はまんまと馬鹿みたいに彼女になってしまった。そしてオカマが苦しんでいる時、特進クラスではまだ決着のついていなかった山下gameが続行されていた。

早く助けにこんかいっ！バトルしてよ、バトル！と突っ込む声が聞こえたような気がしたが、多分そこらへんの怨念かなんかだろうと三人は聞き流していた。

第10話：vs生徒会四天王　～V系担当のyuki～

せつかくいい所だったのに明日香が連れ去られたという、かなりどこでもいい事を思い出してしまった特進の三人は頗る嫌な顔をしながら明日香を探しに行く事となった。

しかし、その時明日香は神楽にとんでもない事をされかけていた！

「やめて下さい！僕は男ですよ！？」

僕は神楽の下で思い切り抵抗した。が、体はびくとも動かず、徐々に神楽の顔が近づいてくる。

「無駄だよ。僕からは逃げられない。それともあれかい？君が大事にコツコツと集めていた牛乳キャップを爆発させてもいいのかな？」なんて物を収集してんだ、僕は！！

くっ！なんて卑怯な奴なんだ、神楽。自分の権力を最大限利用し、人をねじふせるなんて！

あ、でも僕は別に牛乳キャップ収集家じゃないよーん。

「僕を……どうする気なんだ？」

「ん？別に何もしないよ。僕は君の嫌がることは絶対にしない。あ、それとも20年間勤めた会社をリストラされ、妻には逃げられ、揚句息子はドラッグ依存。それでも今日まで持ち前のプラス思考で頑張ってきた中年オヤジのたこ焼き屋ごっこでもする？」

嫌だよ!!!

そんな、かなり暗い癖にめちゃくちゃ明るい遊び。なんか複雑な気分になるよ!!!

「やっぱりあなたも普通じゃないんですね。きっとそうだと思ってたけど!」

僕はジタバタとものがきながら神楽を睨みつけた。

「どうして?僕は限りなくまともなキャラだよ。あんな濃い連中と一緒にするのは止めてくれ」

神楽は僕の上で冷笑して見せる。綺麗な顔だけに余計憎く思える。

「あの人達を悪く言わないで。確かにふざけた事ばかりしてるけど、根は優しい人達なんです!」

僕はきっぱりと言い切った。と、その時、廊下から聞き覚えのある声がした。

「はあ。もういいじゃないか、BoyあんどGirl。マリアはアンソニー坂田の弟子にでもなったのさ」

この声は狂夜先生!ほら、やっぱり僕を助けに来てくれた!!

「でも最初に御主人様を助けに行こうって言い出したのは狂夜先生ですよ?」

お宅さんの声。みんな、みんなやっぱり僕の仲間だね。僕の目からは自然と涙が零れていた。

「俺はもう疲れたぜ……どうせこの国は同性愛を認めちゃいねえんだ」

「ふん、なんだ幹?君らしくもない。なんならこのオレとランテプーするか?」

んー？

「そうですわね、オタ子もそれがいいと思います。この際、御主人様は死んだと仮定して三人で新たな物語を歩みましょう！」

ふふん。そうかい、そういう事かい。いやいや分かっていたよ……どうせそんなオチだろうと思っていたさ。へーんだ！脳内たくあんまみれの三馬鹿トリオが！塩コショウを喉に詰まらせるってんだ！あつかんべーのお前の父ちゃんホツチクス！！（明日香は極度のストレスにより、精神異常を来たしております）

「どうやら君のオトモダチは助けに来てくれないみたいだね？」
神楽は嬉しそうに笑う。くそっ！ここまでか。このまま神楽の言いなりになるしか僕には道は残されていないのか……！？

「あ、マリアだ」狂夜先生が教室の外から中の様子を伺っている。
「何言ってるんですかつ狂夜先生。御主人様はカーテンで遊び過ぎて死んだんですよ？」

お宅さん、僕に何か恨みでもあるんですか？

「助けるか助けられないかジャンケンで決めようぜ」
幹君酷いよ！しかもジャンケンってなに？負けた方が僕を助けるってこと！？

「はあ、仕方ないな。茶畑極悪事件を読もうと思っていたけど……助けないと話が進まないからな。みんなマリアを助けるか」
狂夜先生はため息を漏らしながらボソツと呟いた。

ってか、さっきから気になってたんだけど、何でみんな嫌々なの！？

なに？その陰湿な嫌がらせ。

「という事で、仕方なくナイトが助けにきてやったぞ、マリア！！」
三人は今来たかのようなそぶりで教室のドアを勢いよく開けた。
仕方なくって言うなよ！！みんな僕の事が嫌いならはつきりそう言
って貰えませんか？

「はあ、やっと来たか」

神楽は僕の体から離れて三人に向き直った。

「うつせえ、神楽！さっさと明日香を返しやがれ！」

「無理だと言ったらどうする？幹孝久」

神楽と幹君の間で激しい睨み合いが続く。

「神楽会長。ここはボクに任せてもらえませんか？」

突然僕達の背後に現れた声の主は教室のドアの前に突っ立っていた。

「yukiか。君が他人に興味を持つなんて珍しいな」

神楽はドアの前で佇む人を見て微笑した。

「会長がわざわざ相手する程の連中でもないと思ったので」

yukiは僕達を一瞥することなく教室の中へと入ってくる。

ん？この人よく見たら化粧してる……特に目の周りが真っ黒だ。ひ
弱そうな体つきに黒い派手なロングコート。おまけに髪の色が白と
黒と混ざってて、致る所にピアスがじゃらじゃら。

「おいてめえ！オレらを馬鹿にしてんだろ？」

幹君のこめかみに自然と血管が浮き上がる。

「短気だな。ボクは熱苦しい人は嫌いだ」

yukiはサラッと髪を掻きながら吐息を吐く。

「こいつ……おい！マジでキレたぜ！オレと勝負しやがれ」

幹君はyukiの胸倉を掴みまくし立てる。

「勝負？勝負だって？ふふ……そうか、キミは生徒会四天王の一人、このビジュアル系担当のyukiと勝負するっていうのか」

ビジュアル系担当！？

「上等だ！オレは特進クラスのロック担当だからな！」

ええー！？かなり嘘に無理があるよ幹君。今のうちに謝りながら逃げなよ。

「ふん、ボクに勝負を挑むなんて……身の程知らずだな」

意味深な笑みを浮かべるyukiに立ち向かう自称『ロックの六の段』幹！

果たしてこの闘いの結末やいかに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8057e/>

学園遊戯 ～オレ達が出逢ったのは偶然じゃない...奇跡という名のdestinyさ～

2010年10月10日17時21分発行